



## 話題の本棚

高瀬隼子著『いい子のあくび』

出口康夫著『京大哲学講義 AI親友論』

特集／京大作家インタビュー（第三弾：谷崎由依）

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyoku/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/)



UNIV. 京大生協  
CO-OP 綴葉編集委員会

「うい子」と言われ続けてきたあなたへ

うい子のあへび

高瀬隼子著  
集英社



高瀬隼子は、大人が静かに抱えている心のぎらつきを描くのが上手い。拗れるのが面倒だから、そういうものだからと、笑顔で覆い隠したその奥にあるどろっとした感情を冷静に観察し、目線の動きや姿勢、眉の傾きなどの微細な描写で事細かに表現する。

だから、読み終えた後はちょっと嫌な気持ちになる。見透かされているみたいで。今まで私がうまくやり過ぎてきた心の棘を、一個一個拾い集めて差し出されているみたいで。だけど、自分の黒い部分を描写されるとなるとなく安心するの事も事実で、どうしても読みたくなる時がある。本書も、そんな怖いもの見たさのような気持ちで手に取った。芥川賞を受賞した『おいしいごはんが食べられますように』の後の、第一作目となる作品である。

主人公の佐元直子は、周囲が求めていることに敏感で、そして求められた通りの振る舞いをしてしまう「いい子」だ。と言っても、ちょっとしたことなのだ。前から歩いてくる人がいたら先によけたり、上司のつまらない話を笑顔で聞いたり、職場のコーヒーが切れているのを真っ先に気づいて補充したり……。

しかし直子は、ある時から記録をつけるようになった。

「朝の駅、歩きスマホにぶつかられる」

「マンションの前で煙草、ベランダから水まぐ」

社会は不公平だ。「いい子」ばかりが割を食って、それに甘んじている人々は「いい子」の存在に気づかない。だから直子は、怒りを記録し、そして道をよけない人の分をよけるのを辞めた。ぶつかっても構わない。自分が傷つけられた分、薄められた分、「割」を平等にするために。——そんなことをするくらいなら、「いい子」をやめればいいじゃないかと、あなたは思うだろうか。

話の折々に、祖母に関する直子の記憶が断片的に描かれる。

「握りごみしをつくった祖母の手。その形にへっこむ母の腕や背中。」「やな子じゃねえ、と言う祖母の声が聞こえる。わたしはいい子にしてきたから、実際には一度も言われたことがないのに、鮮明な声で聞こえる。やな子じゃねえ、ほんまに、やな子。」

祖母と母の間に何があったのか、これらがどんな文脈で発された言葉なのか、明確に描かれることはない。だからこそ想像してしまおう。「やな子」だと思われてはいけないと自分に言い聞かせてきた直子を。「いい子」の反対は「悪い子」ではない。「やな子」にならないように、人の話は興味を持って聞き、細かいことに率先して気づき、にごやかに、愛想良く、愛嬌が無いと思われないようにしたいといかないと、幼い直子は感じとってきたのではないか。

残念ながら、「いい子」であり続ける直子に共感する読者は多くいて、一方で何も分らないと戸惑う人も少なくないのだと思う。直子の静かな反抗は、あなたの目にどう映るだろうか。(荻漢)

(一七六頁 税込一七六〇円 7月刊)

## 常識破りのAI論、いや、これは人間論だ

京大哲学講義  
A-I親友論

出口康夫著  
徳間書店



表紙左側を見てほしい。ゆるい感じがする丸眼鏡の男性がいるが、私は彼によく似た人物を大学構内で何度も見ている。京都大学哲学研究室の出口康夫教授だ。そう、本書は、彼による初の一般向け書籍、それもです・まず調でフレンドリーに語られる一冊なのである。しかし、やさしそうな第一印象に反し、本書は哲学入門ともAI入門とも言えない。序文で、『AIと人間のあるべき関係』を問うと、『AI』を問うことであると同時に、いやそれ以上に『人間』を問うことでもあります。本書の影の主役は『人間』なのです」と宣言すると、第一講から『『できない』』という『かけがえのない』』、『われわれとしての自己』といった馴染みのない概念を導入していく。さっそく出口哲学がお披露目されるのである。AIだけでなく人間観についても常識を覆さんとする本書は哲学の最前線といった様相であり、面食らいつつも興味を惹かれること請け合いだ。

\*

出口哲学の核をなす「われわれとしての自己」という概念について説明しよう。これは、どんな行為も自分一人ではできないという点に注目し、行為の主体を「わたし」ではなく「われわれ」とみなす考え方である。自転車に乗るという行為を例に取れば、そこに

は「わたし」以外にも自転車や道路といった必要不可欠な存在があり、それらはみな共に行為する「われわれ」の一員であるという。

このような「われわれ」の枠組みへの転換を基盤として、よき／悪き、責任、権利、道徳性、人格といった概念も「われわれ」仕様に交換されていく。曰く、「われわれ」における悪きとは排外と内部への同調圧力からなる全体主義傾向であり、「わたし」を含むメンバーのそれぞれは、その反対の「よいわれわれ」を目指す責任を分担して負っているのだ。急には飲み込み難い部分もある。しかし、共同行為のあり方を価値観のベースに置くことで、現代の、自由な個人の集合が構造的な不正義を生み出しているという問題に直接切り込める点は意義深いのではないだろうか。そしてこの世界観は、人間だけではなく、「われわれ」の一員である自然環境や機械に対する搾取にも待ったをかける。AIは奴隷ではなく共冒険者であるというモデルが提示され、更に未来のAIは人間と同等の責任と権利を持ちうると主張する点に、本書の特異性がある。

\*

個人主義に慣れきった私にとって、「わたし」が能力を行使して「わたし」の幸福を追求しようという思考は自然なものだった。それゆえ、「わたし」の特権を解体する「われわれ」としてのあり方を真剣に考察するのは、負荷が高く、苦しいことではなかった。しかしこの人間観の大転換の先に、本書の最後に論じられる、AIと親友にだっとなりうる世界観があるのだと思うと、その意義を抜きにしてもワクワクする。常識を壊すのはいいだって楽しい！（朝露）

（二〇八頁 税込二八二五円 7月刊）

〈特集〉

京大作家  
インタビュー

多彩な京大出身の作家さんにお話を伺う「京大作家インタビュー」。

第三弾は、小説家・翻訳家・近畿大学准教授と三つの顔を持つ谷崎由依さんにお越しいただきました。

幻想的で美しい文章、詩情豊かな語り、いくつもの言語の味わい、女性性、植物、生きうみ出す苦しみ、歴史……。谷崎さんの物語は静かに熱を帯びていて、導かれる我々は、深い森を彷徨うよう、夜の海へ小舟で漕ぎ出すよう。

物語を書く。物語を読み別の言語へ移す。物語を教える。様々な角度から物語に向き合う谷崎さんの内側に迫ります。

(ひるね・黄丹・浅煎り)

——本日はお忙しいなかお越しいただき、ありがとうございます。谷崎さんは『綴葉』をご存知だったのでしょうか。

山尾悠子さん翻訳の『白い果実』の書評を『綴葉』で書いたのが、私の文章が初めて活字になった経験でした。思い出深いですね。

——そのような出会いがあったとは光栄です！ところで、谷崎さんはどのような学生生活を送っていたらっしゃったのでしょうか。

家に引きこもって、とにかく本を読み文章を書くような生活でした。サークルに入ってみてもどうも人付き合いがうまくいかない。私は福井の田舎の高校出身なのですが、入學すると浅田彰とかを普通に読んでいる人がいて、構造主義とか脱構築とか「何それ」と。受験勉強の反動もあって、最初の一・二年は「いろんなものを吸収しないと間に合わない」

「学校の勉強じゃない勉強をしないとイケない」という焦燥感や劣等感がすごくありましたね。その辺の焦りはデビュー作の『舞い落ちる村』にも書いたのですが、他の人は自分より口が立つし、いろんなことを知っていて頭がいい。一方で、学生生活楽しもう！というのんびりしたノリも共有できない。

——なるほど。ではそうした焦燥感はどういうに変化していったのでしょうか。

休学してイギリスから戻ってきた三・四回

生になってようやく焦りが消えてきました。最初は「周りがこれを読むから読まない」とだったのが「私がこれを読みたいから読むんだ」に。二回生の時にガルシア・マルケスを読んですごい面白いと思ったんですけど、周りは誰もわかってくれなくて(笑)。でも自分を取り戻せてからは、ちょっとずつ自分も含む本、合うものに気づきはじめました。

◆  
《翻訳と創作》

——作家として一から書く一方で、既にあるものを日本語にするという作業もされています。翻訳は解釈と言われますが、谷崎さんにとって「翻訳」とはどのような営みですか。

確かに解釈だと思います。自分で一から書くときは、映画の監督も舞台美術も役者も全部自分でするようなものですが、翻訳の場合はすでに脚本はできていて、あとは演じるだけ。演じるところに全力をふれるので、逆に思い切り言葉と向き合えるところはあるかなという気はしていますね。もちろん過剰解釈は良くないですが、作者が原文で与えたこの言葉を、じゃああなたは日本語でどうする？という挑戦をどう返すかみたいな楽しみみたいなものはあると思います。

——ご自身が「創作」として書くことを理解できるからこそ、「翻訳」して書く際に、作

者が厳選した語にふさわしい日本語が見つからないというような葛藤はないでしょうか。

ありますね。そういうときは仕方がないので、言葉以前のレベルまで分解します。言葉のレベルで訳すのではなく、この人が言おうとしている状況や思いを日本語で言い直すところなるのかなと。やりすぎると良くないですが、単語レベルでどうにもならないときには、言葉から一歩下がってみたりしますね。

でも本当はね、言葉で書かれたものだから、言葉という土俵の上でやりとりするのが正しいのだと思います。だけど、どうしても日本語と英語では言葉同士の領域を区切るものがないところがあるので仕方ないのかなとは思っていますね。

——『すばる』(二〇一九年一月号)の鼎談で翻訳について挙げられた「他者の言葉を生きた」という言葉が印象的でした。作家としてご自身の言葉がある中で、翻訳もするというのはどのようなものなのでしょうか。

翻訳することで自分の中が豊かになる、焼畑農業みたいな感じでしょうか。それまでの自分の文章や日本語へのこだわり、大和言葉が好きであるとか、そういうものを意識して作った文体は、翻訳すると全部壊されて翻訳文体で訳すことになるんですね。すると、今まであった文体が全部燃えてしまって何も無い

という感じになるんですが、多分そうすることによって、新しい芽がそこから出てくるのかなと。良い小説を翻訳した後は、良い小説が書けるのかなという気がして。『遠の眠りの』を書く前は『地下鉄道』を訳しました。その残響の中、翻訳の余韻の中で書くこと、またそのとき訳した小説のエッセンスが自分の中に残っていて、その養分があるから、書く力がまた湧いてくるみたいなのはあるかなと思います。



◆  
 〈ひと呼吸のための樹・命の循環への思い〉  
 ——『鏡の中のアジア』の「天蓋歩行」や『臺の王』など谷崎さんのご作品に植物がよく登場する理由を伺いたいです。

人間がわからなくて、植物に共感することがあるからかな。特に「天蓋歩行」はコンセプトが「人間のことがよくわからずむしろ樹に近い人間の視点で書く」なんです。それって極端な話ですけど、人間のことがわからないうち、世の中で常識とされていることから空気を読むみたいなことができない人もやっぱり結構いると思う。私もあんまりできる方じゃないし。みんな常識だと思っただけで疑ってみると実は面白かったりするのかなって

たりするのかなって  
 いうところからですね、「樹」という風にしたのは。



——「天蓋歩行」を読んだ時、樹に近い視点に気持ちがいってました。植物の世界が色濃く描かれているのは人間としての生きづらさみたいなもの、現れなかなと見えながら拝読しました。

「天蓋歩行」を読んでほっとしていただけてすごく嬉しいです。福井は樹が沢山生えていて、高校時代は桜並木が続く川縁を歩くのが好きでした。そこを歩いて帰る時、樹を見ていると自分の中の何かが少し回復する気がして。あと私ほとんどなくなる心象画を描くんですが、そこには必ず樹が出てきます。樹があって、周りに生き物がいる幻想画なんです、描いていると落ち着きますね。

——「天蓋歩行」では前世に焦点が当たっています。谷崎さんの死生観が表現されているのでしょうか。

あまり考えたことはなかったんですが、この時は、高層ビルと樹が二重写しになるからビル街は物語の舞台であるマレーシアにかつて存在した森の生まれ変わりの話も深々考えずイメージで書いてたんです。

若い頃両親が共働きで、曾祖母と家に二人で、地獄と極楽とか輪廻転生の話をずっと聞かされていました。何年か前に祖父母が他界し、娘を連れて帰省したんです。すると、「なんでなんで期」の娘が全部なんで、どうしてって聞くんです。どうしてお墓に行くの、どうしてひいおばあちゃんとおひいおじいちゃんは帰ってくるの、どうして魂だけ帰ってくるの、みたいに。延々問答してる内に、自分でもそうなんか、ほんまにそう思ってるんかなって。家族が死んだり生まれたりした経験がない頃はそういう考え方っていう知識しかなかったけど、実際に経験するとほんまにそうなんかなって思ってる自分がどこかにいて。聞かされてきた文化っていうのは染みついているんかなっていう気はしますね。文化には頭では割り切れないものがあるのかなって思います。

### ◆ 《女性やマイノリティへの抑圧と連帯》

——谷崎さんのひとつのテーマとして、女性やマイノリティに対する抑圧、それに対する抵抗や連帯の可能性があるように感じます。虐げられた名もなき人々についての物語は、どのような思いで書かれたのでしょうか。

曾祖母や祖父が昔のことを語ってくれるのがすごく好きだったんです。祖父は自伝を書

こうとしていた形跡があるんですけど、A4に二・三枚残っていただけで、多分あまり書くのが得意じゃない。自分の周りの人たちはすごくいろんな思いを持っていただけでも、それを文字にしない人たちがたくさんだろうな。曾祖母や祖父の世界と物語は、自分が幼い時に一番吸収してきたお話なのでそこが身近であるし、それを文字に起こしたいという気持ちはずっとあるんだろうなと思います。

それを書こうとした場合、懐かしさだけを書くこともできるけど、どうしてもどこかで怒りや不公平、不均衡が出てきてしまつ。やはりそれは女性のものになりがちで、私自身が抱えている怒りでもあると思います。完全な主義主張にはならないようにと思いますが、自分の原風景として与えられた物語がそんな曾祖母や祖父の物語で、断片的な言葉でしかなかったから、自分がそのなかに入って旅してみたいという気持ちで『遠の眠りの』は書いたような気がしますね。自分にとっての懐かしさの源泉をちゃんと知りたい、と。



——『遠の眠りの』や『囚われの島』には、虐げられた人々が国籍・ジェンダーを超えて繋がる可能性や、単純な一枚岩のシスターフ

ッドに回収されないような連帯のあり方が示されているように感じます。

シスターフッドには回収しきれないけど連帯しないところにもならない、けども連帯しきれない、という微妙さはすごく感じるし、それはひとつ書こうとしていたことですね。

フェミニズムの地方と都市の格差についていえば、東京や都市部において声を上げている女性たちにはもちろんすごく賛同するし、出来ることからしていくことは大事です。一方で、それは福井にいる地元の友人たちや少し上の世代の人たちにもこのように響くのだろう？ 私たちが生まれた土地のこの状況は見える？ と。そこが解消されなければ、本当にフェミニズムが達成されたとはやはり言えない。そうした怒りは私のどこかにずっとあるように思います。

——そうした経験を事実として見据えることと、それを物語にすること。この両者の距離についてどのようにお考えでしょうか。

その距離感はこの一〇年一五年ですごく変わったなと感じます。アカデミックな話をすると、当事者性というものはあまり重要視されていなかった。「作者は死んだ」「みたいな話ですよ。でも今はすごく当事者性というものが大きなものになっていて。私が二〇歳前後の頃は潔癖症的なものがありましたけど、

今であれば「ほんとのことをお話にしてしまった」ことで自責の念に囚われて書かなくなることはないという気はしています。私も曾祖母や祖父のごと、福井のその時代のことを書きたいと思う一方で、当人にとってはそれは嫌ではないかとも思うわけです。でもそれは、当事者の方が嫌だと思うかどうかだけではなく、倫理や小説に対する姿勢の話でもあるのだと思います。

多分私が最初に幻想文学しか書けなかったのはそこだと思っんです、本当はね。話がいきなり変わりますが『ゲーム・オブ・スローンズ』とか好きなんです。ファンタジーの中でこれは現実ではありまじいと言っくと、なんでも書けるじゃないですか。本当のことじゃなければ責任も生じないし、私が一人で遊んでいるだけだから誰にも迷惑かけない。でもこれは現実と地続きですよと言っった途端に、ものすごくきつんとしなければならぬ。それは多分、学生時代の私がいじり下手で、何かを説明するのにもつれてしまう人間だったから。だから最初は本当に現実と続いているものを全く書けませんでした。社会学とかもやりたかった一方で、幻想文学の側にいる限り自分は安心だという思いもあった。でもその二つの核は表裏一体で。

現実立ち向かうこと責任の重大さに押

しつぶされそうになっていたのが変化してきたのは、世の中の流れというよりも『地下鉄道』を訳したことの方が大きいかな。『地下鉄道』はファンタジーなんだけども、現実を書いているんですね。私がファンタジーや幻想文学を好きだったのは、誰を傷つけることもないのに現実の残酷さを鏡のように映すことができるから。でも『地下鉄道』を訳したときに、「ファンタジーとかストレンジフィクションはもうここまでできたんだ。現実ギリギリまで近いところに鏡を置くことができるんだ」と思っって。『遠の眠りの』は歴史小説として読まれたりもしますが、私は歴史からではなく、幻想のなかに歴史をちょっと取り入れている。普通の歴史小説とは少しアプローチが違うのではないかと思っっています。

### 《読むことと書くこと》

——「書くこと」に対して「読むこと」については、前述の鼎談において「わからなさ」との対峙という視点が示されていました。

今、哲学科出身の方の小説を読んでいて、「わからない」ということにずっと対峙してきた人の文体だなと感じます。思考の中に幅があるというか、文章の懐の中にとてもたくさん時間が入っている感じがする。それを受け取ることによって、自分の中にさうい

ポケットができていく。そして、危機に立たされたときに、さういう「わからなさ」に接してきた経験がなにかの足しになるのかな。わからなまま読んでいたものって、自分の中で地層みたいになっている気はします。「わかる」だけで流れていくと、雨が降ったら流れていってしまうような地盤しかできないような。大学の授業で読むテキストとかわからないですよ。一時間に数行しか進まない。でも結局はね、それが大事だったのかなと思っいます。

——私たち大学生は、どんな本を読んだらよいでしょうか。

やっぱり古典かな。自分の専門にかかわらず、名作と言われるものに通り目を通してほしい。多分みんな自分が何者かまだわかっていないと思っつので、何でもいから幅広く、まず読んだらいいと思っつのはドストエフスキー。結構笑えるし、二〇歳くらいのテキストにも合う。そういう意味ではサリンジャーも是非読んでほしいと思っいます。

——最後に、京大生に向けてメッセージをお願いします。

皆さんはなんでもできます。これからなので大丈夫。これは京大生だった頃の自分に向けた言葉かな。

(聞き手…ひるね・黄丹・浅煎り)

## 新刊コーナー

地球にいろいろ図鑑  
鉱物×日本の伝統色茜灯里著  
化学同人

ジェダイト（翡翠輝石）、青竹色、ヤネハンダイソウ、カワセミ。これが一ページに詰まっている図鑑は何の図鑑でしょう？

本書『地球にいろいろ図鑑』は、様々な鉱物の歴史、名前の由来、化学組成に屈折率、モース硬度などを網羅しているれっきとした鉱物図鑑だ。そうでありながら、もう一つのテーマとして日本の伝統色を取り上げ、もう一つのテーマとして日本の伝統色を取り上げ、虹の七色十無彩色の順に一五種の色と鉱石を配列している。そして先述のように、各ページには似た色の植物と動物の写真も併せて掲載。学習図鑑とは一味違う、ユニークな構成だ。

図鑑らしいA4判ではなく、ソフトカバーのA5判で製本されている点からも、色彩の美しさを気軽に楽しんでほしいという意図が感じられる。パラパラとめくって、目に飛び込んだ鉱石を読み込むのもいい。見事に表現された伝統色の語彙に嘆息するのもいい。動

植物だけ眺めたっていい。そんな本だ。

ただ、ユニークな本書特有の欠点もある。個別解説とコラムで知識は身につくが、色順である以上、鉱物を系統立てて学びたい人には向かない。例えば、レッド・ベリルの解説で、エメラルドとアクアマリンも同じベリルの一種であると言っても、それらはパラバラのページに掲載されているのだ。しかし、色の世界で遊ばんと本書を開くならば、索引を使って赤の章から緑の章、更に青の章へと旅行することも一つの楽しみとなる。自由な気持ちで、気になる色からご堪能あれ。（朝露）

（二六二頁 税込二八七〇円 7月刊）

## 一泊なのにこの荷物！

本上まなみ／澤田康彦著  
ミシマ社



「このへんでこなタイトルは、出かける支度をするたびトランクやリュックが

ぎゅうぎゅうになってしまわが家のあり方の象徴」。本作は俳優・本上さんと編集者・澤田さんご夫婦の共著。「しゅっとしたライフスタイルに！」と願いつつ、実際は「スマ

ートからほじ遠いもっさり感」と語るお二人に、荷物多い民の私はきゅっと心掴まれる。

お二人が同じテーマでエッセイを綴る本作「同じものを食べていても同じ人間にはならないってことを再認識した」とあるように、お二人の個性が際立つ。天真爛漫で力強く輝く生命力が眩しい本上さんと、ひねた書きぶりでも家族愛と可愛らしさが隠しきれない澤田さん。ちびまる・おやびんと呼び合うお二人に口元は緩みっぱなし。そしてお子さん達もやっぱり素敵な味をお持ち。中学生の娘さんは筋金入りのロングスリーパー。「ごむ猫」なのにお父さんに湯たんぽを譲る心優しいのんびり屋さん。六歳差の息子さんは現在荒ぶる中で一人称「ほかあ」、でもお布団で「しろぼん」(大事にしているアザラシのぬいぐるみ)のお話」をお母さんにねだる。愛らしい……。  
ご一家は茂茂川で、「おかあさん体探」(他人の振りして眺める澤田さん曰く「UFOを呼んでるよう」)をする。翌年は「にせラックロス」。季節は巡り、モルック。時は進み、ドタバタ楽しい日々は帰らぬ数頁の鮮やかな記憶となる。切ないけれど、続く未来もきっと笑顔溢れるものでしょう。きらきら光る川面を想いながら、自らの六年の京都暮らしを重ねながら、願いを込めて筆を置く。（黄丹）

（二二四頁 税込一九八〇円 4月刊）

## リボルバー

原田マハ著  
幻冬舎文庫

「ファン・ゴッホは殺されたのよ。ゴッパンに。——あのリボルバーで撃ち抜かれて」

パリのオークション会社に持ち込まれた「丁のリボルバー。俄には信じがたい「いわく」の追求に、社員のタカトウ・サエが挑む。彼女は単なる社員ではなく、ゴッホとゴッパンの研究者でもあるのだ。〈フツ〉を持ち込んだ女は、それを彼女の母から受け継いだという。なぜ母はそれを持っていたのか？二人の画家との関係は？

研究者として〈ゴッホ他殺説〉は認め難い。一方で女の話に強烈に惹きつけられる自分がある——サエは葛藤する。ゴッホは「ゴッパン」と共同生活をしたものの、「耳切事件」により離別する。そしてその後精神を病み、ピストルで自殺した——それが「史実」だ。しかし「事実」はどうだろうか？ 彼が自殺を凶った現場は誰も目撃していないじゃないか。もしかしたら、いやそんなはずは……

ゴッホとゴッパン。あまりにも有名な二人だが、その生涯まで知る者は多くないのではなかるうか。だからこそ、本書の内容は「もしかするぞ」と読者を掴んで離さない。本書ではサエの生きる現代とゴッホらの生きた過去が描かれる。無関係に見える二つの時間軸がいかにも重なるのか、そこが本書の見どころだ。アートに関心がなくても大丈夫。「ミステリ」としても本書は十二分に読み応えがあるのだから。ゴッホとゴッパン、そしてリボルバー——。本書を片手に、その真実を撃ち抜け。

(三五六頁 税込七三七円 7月刊)  
(投稿・不登校)

現代短歌バスポート  
シュガーしらしら号

神原紘／その他9人著  
書肆侃侃房



短歌は敷居が高い。そんな固定観念を打ち破るべく創刊されたのが『現代短歌バスポート』シリーズである。価格を抑える、持ち運びしやすい大きさにする、ポップな絵を表紙にするなど、若者が手に取りやすいよう工夫を凝らす。本作は気鋭の10人による

る歌が収録された、記念すべきシリーズ第一作だ。中でも私が気に入ったのは次の二首。  
〈シュガーポットのシュガーしらしら あげたいな 心当たりの当たりの部分〉 神原紘  
歌人・穂村弘は、繰り返しを用いる近年の歌からは、詠み手が「他者とのコミュニケーションの回路」を求めているように感じられるという。実際、この歌からも心当たりのある何かに焦点を当てることで他者と繋がる術を探している印象を受ける。特に「あげたいな」から相手がいることを想定しているのではないかと考えられる。

〈カップへと注ぐミルクの一筋を生活の背骨と思うほど〉 谷川電話

この歌を目にした時、毎日高所から牛乳を注ぐ人の絵が即座に浮かんだ。端的に情景を表す表現力は丘巻だが、それ以上に注目すべきは「背骨」の句またがりだ。この単語が接着剤となり、四句と結句が強固に結びつく。まさに背骨が身体を支えるかのように歌を支える。鳥肌が立つほど感動した。

二首のみの紹介となったが、どの歌も題材が身近なせいか、日常をそんな風に切り取れるのか！という驚きに満ちている。ぜひご自分の目で確かめてほしい。シリーズ二作目への期待が早くも高まることだろう。(前髪)

(一一二頁 税込二一〇〇円 5月刊)

## 日台万華鏡

## 台湾と日本のあいだで

## 考えた

栖来ひかり著 書肆侃侃房



「普通話」は（中国）大陸の言い方で、台湾では北京語と言うね。台湾で一般的に

使用されるのは台湾華語。台湾人にこう言われ、「普通話」と発言した己の失礼さを反省していた折、台湾と日本が主題の装丁が一期美しい本と出会った。それが本エッセー集だ。

著者は山口県出身、京都市立芸術大学卒、

現在台湾在住の栖来ひかり氏だ。五部（社会、ジェンダー、日台文化比較、歴史交錯、映画・アート・本）、全三三項目で構成される。特に、三番目の項目に記された台湾原住民タ

イヤル族の方とのやり取りに私は啓発された。

台湾華語話者が発音しやすいように本名の「ひかり」ではなく「光子（クワン・ズン）」と名乗った著者に、タイヤル族の方は「本当の名前の読み方を教えて」と言ったそうだ。その時に著者は自分の名前や言葉を奪われたことがないと感じていた。実は、私は英語圏に留学中、発音を巡り自分の名前の読み方を変えろか悩んだことがある。この悩みは同化の問

題だったのかと著者の気づきを読んで理解した。この問題は台湾以外にも、日本語が優勢の日本をはじめ世界中で起きている。少数派の言語に考えを巡らせる良い機会となった。

その他、台湾と比較した日本のジェンダー問題、戦時中・戦後の日本との関係、中国大陸からの資本流入等トピックは多岐にわたる。これらが台湾と日本のあいだの視点から描かれているのが本書の特徴だ。無知によって誰かを傷つけないためにはまず知識が必要だ。本書は専門書ではなくエッセー集だが、得べき知識はたっぷり詰まっている。（前髪）

（二五六頁 税込二七六〇円 5月刊）

## ふつつの相談

東畑開人著

金剛出版



私は「ふつつ」が  
いまいち分からず、  
日々の生活の中で  
「ふつつにして」と

親から叱られてきた。卒業式で何の感慨もなく無表情でいた時も、「ふつつに喜んで」と。社会に適合するため、そろそろ「ふつつ」を学ばねばと思ひ、本書を手にとった。

本書における「ふつつ」が意味するのは、ありふれた、素人の、といったものである。

臨床心理学には様々な理論があり、人間がいかに病み、いかに癒されるかという物語を編んできた。臨床の現場では、これらの理論にクライアントに応じて修正を加えたものを用いて、対人支援を行ってきた。こうした理論は非常に強固であり、一貫性を持つが、普遍性を求めるあまり社会的条件を捨象している。その結果、専門性を持たない素人的な相談が持つ価値は、理論からは軽視されてきた。著者の狙いは、局所的で多様な「ふつつの相談」

を貫く一般的な構造を見つけ出し、「ふつつの相談」に主軸を置いた理論的枠組みを描くことである。この地図こそ、臨床心理学における素人性と専門性の関係を俯瞰できるようにヘルスケアの一般理論、「臨床学」である。期待していた「ふつつ」を得ることはできなかった。しかし、現実の複雑さに負けず局所的な「ふつつ」に還元し、「ふつつ」を純化していくことで専門知が得られるという視点の逆転によって、純化された理論と複雑な社会を接続しようとする試みは衝撃的なものだった。抽象的な数学と、現実に対峙している物理や工学との関係に類似しており、社会で数学を活かす一助となる気がした。（筏）

（二〇〇頁 税込二四二〇円 8月刊）

## 批評理論を 学ぶ人のために

小倉孝誠編  
世界思想社



十月——文系学生  
たちの間で「卒業論  
文」という言葉を耳  
にする季節が来た。

評者の経験から言えるのは、早めの取りかかりが何よりも大事、ということだ。さあ、これを聞いてやる気になった二・三回生の皆さんに(そして、今になって焦っている四回生の皆さんにも)、是非とも本書をお薦めしたい。

文学批評理論を学ぶ理由はシンプルだ。

「漠然とした感想文のレベルを超えて、作品的な議論を構築することが解釈であり、批評」ということになる。そして感想から解釈へ、

感動から批評へと飛躍するには一定の方法が必要になる。興味を持った作家をどの角度から見つめ、どう掘り下げていくのか。批評理論とは、凝り固まった作品の読みを風穴を開けるための道具である。この道具を使いこなそうとする意識の有無によって、レポートや卒論の学術的価値は格段に変わるだろう。

とはいえ、教科書的に学んだだけでは、理

論を用いて文学を読むことは難しい。こうした憂慮に対し、本書は、理論を援用した作品解釈の具体例を示すことで、文学作品との新たな向き合い方とそれに伴う「おもしろさ」を実感させてくれる。他方、現在でも混同されがちな「フェミニズム批評」と「ジェンダー批評」を明瞭に論じ分けているほかに、日本では認知度の低い最先端の理論をも紹介しており、こうした実践性と先進性こそが本書の肝と言える。

理論は道具だ。道具の正しい使用方法を知ることが、必ずあなたの助けとなる。(はらん)

(三二〇頁 税込二八六〇円 4月刊)

## 応答、しつづけよ。

ティム・インゴルド著

奥野克巳訳  
亜紀書房



人類学者ティム・インゴルド。その影響は人類学には収まりきらず、今や現代

を代表する思想家と呼ばれるにふさわしい。

本書では、「内側から知ること」knowing from the inside」と題するプロジェクトの二環で彼が執筆したアートの批評を中心に、エッセイ、寓話

詩といった様々な形式の文章がまとめられている。火、樹木、山、飛行、地面、時間、石、絶滅、線、糸、言葉、手書き、頭字語、色、二七篇の流れるような文章はそれぞれのテーマと呼応し、深い思索へと入り込んでいく。

「招待」と題された章から本書ははじまる。この短い論考は柔らかく語りかけてくる文体ながら、力強く読者を引き込む。ここでインゴルドは、本書に通底する思想、応答という世界への向き合い方を導入する。世界を外側から言葉で切り分けるのではなく、あらゆるモノが絶えず変化する世界に自らも投げ込まれていることに気づき、手紙を書くように心を込めてモノと対話すること。それが応答であり、応答しつづける過程が生きていることだと言ふ。本書を構成するのは、彼が柔軟に、縦横無尽に世界に応答した実践のコレクションだ。絡み合う言葉をかき分けて進む読書は、深い森の中を歩くようだった。

インゴルドの言い回しや論理構成はときに難解だ。しかし安心されたい。訳者・奥野克巳による全エッセイの論旨を整理した詳細な解説は、必ずや読者の理解を助けるだろう。

インゴルドは哲学者ではない。他者/世界とともに考える人類学的な姿勢で思想を深めた彼の新天地が、ここにある。(たいやま)

(四二〇頁 税込三〇八〇円 5月刊)

## タイミングの社会学

ディテールを書く  
エスノグラフィ―

石岡文昇著 青土社



悔しい。いつか自分こそがこんな本を書くはずだった――そう思わずにはいられない。

本書は今年、いや大学院に入ってから最も評者の血と心を滾らせた一冊だ。

フィリピンの首都、マニラの貧困地区。進む再開発。スラム街に生きる人々は国家権力による立ち退きと強制撤去の圧力に曝されている。自宅を目の前で潰され仮設住宅への移住を余儀なくされた人々。彼ら彼女らの目にこの世界はどのように映るのだろうか。

本書はマニラの貧困と構造的暴力をめぐるエスノグラフィである。彼ら彼女らが対峙するのは、我々の見慣れた予見可能な「世帯」ではない。いつ幾らの収入が得られるのか、いつ強制撤去が実行されるのか、移住先に仕事はあるのか――その未来は不確実な「timing」の連続であり、長いスパンでの思考は奪われる。建てては壊されるような、臨時が永続するような生活のなかの彼ら彼女らの疲弊、怒り、失望、摩耗。石岡はそれらを見届けて記述す

るということに、一縷の希望を見出す。

社会学・人類学・地理学を架橋する本書は、貧困と構造的暴力の現実を明るみに出すと同時に、「いかに他者を記述するのか」を問う理論的考察の書でもある。石岡はマニラについてではなく、マニラから、マニラとのあいだで、言葉を紡ぐ。人間の血肉、汗、臭気、こみや暗闇の恐怖といったディテールに浸ること、読者の既存の世界像は溶融し、他者を理解する新たな社会の見方を獲得できるはずだ。三〇年先も名著として読み継がれるであろう、必読のエスノグラフィ。 (浅煎り)

(四一六頁 税込三〇八〇円 5月刊)

## 社会変容と民衆暴力

人びとはなぜそれを選び、  
いかに語られたのか

須田努編 大月書店



民衆暴力という言葉は、現代日本に住む若者にとって、リアルティを感じにく

い言葉ではないだろうか。序論において【民衆暴力】は「専門集団・国家による組織化された戦争やテロではなく、普通の人びとが行使する暴力」であると定義されている。

本書では、複数名の著者によって日本を含むアジアとヨーロッパにおける民衆暴力に関する研究が描かれている。歴史的側面、ジェンダーの側面、社会的側面、美術・芸術的側面など、数多くの側面から、フランス革命以降の様々な時代に生じた事例や作品について述べられた論集である。それぞれの論文が「宗教・思想を背景とした民衆暴力」「地域社会内部で発動される民衆暴力」「民衆暴力をめぐる表象・言説」の三章に分類されている。ことから、収録論文の多様性が感じられる。

取り上げられている多くの事例から、「世俗化」が促進されている現代社会において、宗教と政治が如何に切り離して考えられないのか、ということが民衆暴力を通じて伺える。フランスを筆頭に近年頻繁に議論されるようになった政教分離とは何であるのか、何故暴力と政治は切り離せないものであるのか、歴史が現在にどのような影響を与えているのか……など、読みながら疑問が止まらない。また、短期的な暴力抑止政策が長期的には逆に衝突を助長してしまう事例も見られる。日常のニュースなどから潜在的知識としてのみ意識していた民衆暴力について、様々な国と時代の事例を用いて、現代日本の学生が実感しやすい形で解釈を促している。

(三三六頁 税込三五一〇円 5月刊)

都会の鳥の生態学

カラスツバメ、スズメ、水鳥、猛禽の栄枯盛衰

唐沢孝一著 中公新書

スズメやカラスをはじめとする、都会に住む身近な鳥たちを「都市鳥」と呼ぼう。本書は東京都心を中心に、意外と知られていない都市鳥の生態をまとめたものである。半世紀以上の積み重ねによる豊富なデータと鮮やかな写真と共に、鳥たちの生態が紹介され、特に都市特有の事情を交えた考察が興味深い。

一例としてツバメの巣事情を見てみよう。

ツバメは建物の軒下に巣を作るが、都市部の狭い路地や格子状のシャッターのおかげで天敵であるカラスからの発見、侵入が防がれる。加えて、ツバメの巣作りに適したモルタル壁の建物が多いこともツバメの都市進出を後押しした。しかし、近年の再開発で営業可能な土地は減ってしまい、巣の密集により婚外交尾の増加という問題が発生している。

人間や都市環境を利用し強かに生きる都市鳥からは自然の力強さが感じられる。しかし、都市の大きな変化に耐えられず、姿を消しつつある鳥たちもいる。都市鳥は時代を映す鏡であるという著者の言葉に、自然との向き合い方を考えさせられる。(後)

(二五六頁 税込二二五五円 6月刊)

資本主義は私たちが

なぜ幸せにしないのか

ナシー・フレイザー著 江口泰訳 ちくま新書

人種間の軋轢、壊滅的な少子化の進行、地球温暖化、ポピュリズムの流行。現代を生きる私たちが危機的な状況に追い詰められた資本主義社会の本質的矛盾を、批判理論家、フェミニスト思想家ナシー・フレイザーが論じる。

人種差別的に配分される劣悪で低賃金な労働、家庭内での労働者/力の再生産、原材料を供給し廃棄物を吸収する自然。利益第一の経済を機能させるため必要なこれらの支援は、非経済領域に追いやられている。著者は資本主義の概念を単なる経済システムから拡張し、支援を無償のまま補食する権限を「経済」に与え特権化する社会秩序として、資本主義を捉える。この概念拡張は、従来の理論では見えない「非経済領域の上に立つ」資本主義の構造を巧みに理論化する。自らを存続させる基盤を喰い荒らす資本主義を、フレイザーは「カニバル（共喰い）資本主義」と形容する。喫緊の課題を克服するためにはまず原因を理解するほかない。資本主義社会を鮮やかに図式化し矛盾の根源を暴く本書は、危機的社會を生きる現代人の必読書だ。(たいやき)

(三三〇頁 税込二二〇円 8月刊)

ハイデガーの哲学

『存在と時間』から後期の思索まで

轟孝夫著 講談社現代新書

二〇世紀最大の哲学者、ハイデガー。彼を抜きにして、二〇世紀の哲学、いや哲学一般を語ることはもはやできない。しかし、この碩学を生んだ地・ドイツでは、彼の存在は等閑に付されている。なぜか。それは「ハイデガー＝ナチ」という図式がそこに形成されているからである。反ユダヤ主義者のナチ・ハイデガーの哲学など、論ずるに及ばない——こつした空気がドイツ全体に漂っている。

しかし本書の著者は、この空気に抗ってこう主張する。「それでもわれわれはハイデガーを読むべきだ」と。なぜなら一般的な理解とは反対に、ハイデガーはむしろ、ナチズムの一貫した批判者だったからである。つまり私たちは、ハイデガー哲学を通じて、ナチズムの問題点を炙り出すことができるのである。著者はこの主張を裏付けるために、『存在と時間』に代表される初期から、技術論に代表される後期に至るまでの思索を、「存在への問い」という視座から丹念に跡付けていく。難解なハイデガー哲学を新書一冊にまとめたいまうその力量には驚くほかない。(ばや)

(五〇四頁 税込二六五〇円 6月刊)

## 思想家としての宮崎駿、そしてその言葉——世界と子どもの肯定

二〇一三年七月一四日、宮崎駿が監督を務めたスタジオジブリの最新作『君たちはどう生きるか』が公開された。その主題歌「地球儀」の作詞作曲を担当したのは、あの米津玄師だった。米津はあるインタビューのなかで、打ち合わせ中のこんなエピソードを語っている——「最初の打ち合わせで宮崎さんからお話しいただいたのはどうしてこの映画を作るに至ったかという、割とざっくりはらんな内容でした。『…子どもたちにとっての世は生きるに値する』ということを伝えていかなければならない。自分にとっての使命はそういうところにあるとおっしゃって。『…実際その言葉をご自身で言って、感極まり涙を流しそうになる姿を目の当たりにして、それはすごく印象的でした。多分一生忘れることはないです』」

この世は生きるに値する——この言葉を読んだとき、私は何だか胸に迫るものを感じた。自分はずっと、誰かにこの言葉を言ってもらいたかったんだ、そんなことを思ったりもした。私が『宮崎駿』という人間にどうしようもなく心惹かれるのは、おそらく彼の根底に、こうした力強い思想、つまりこの世界とそこに生まれ落ちる子どもたちを何としても肯定しようとする切なる思想が存在しているからなのだと思う。養老孟司との対談集『虫眼とアニメ』のなかで宮崎は、世界はたしかにどうしようもないことになっていくと述べた後、こう語る。「でも、やはりその子どもたちが生まれてきたことを「間違っていました」とは言えないでしよう。」「…」生まれてきてよかったねって言おう、言えなければ映画は作らない。自分が踏みとどまるのはその一点だけだ。



養老孟司

虫眼とアニメ

宮崎駿

それでもなお「世界」と「誕生」を肯定しようとする——このいわば「反・反出生主義」とでも言うべき姿勢が、宮崎の生涯を貫いている。そして私たちは、世界を否定したくなるような出来事に満ちあふれているこんな世の中だからこそ、彼のような「肯定の思想」を内に秘めた人間をひそかに必要としているのではないだろうか？ つまり時代が再度、宮崎駿という思想家を要請しているのではないだろうか？ 宮崎は「アニメーター」や「映画監督」であるより以前に、ひとりの「思想家」なのだということ、私はそれを『出発点』と『折り返し点』という、ずっしりと重たい二冊の本から学んだ。

この二冊とともに、宮崎によるエッセイ、企画書、対談、講演、書評、インタビューなどをまとめたもので、前者は一九七九年から一九九六年までを、後者は一九九七年から二〇〇八年までを対象としている。宮崎駿の自然観や教育観、映画論や漫画論など、この二冊を読めば「映像」ではなく「言葉」を通して、宮崎駿という人間を知ることができる（私は彼を「言語化の達人」と思う）。「この人には逆立ちしても敵わない」——私は本書を読む度に、そう嘆いてしまう。それほどまでに、宮崎の知識は広く、思想は深い。最後にもう一度、宮崎の言葉を引いておこう——「それでもやっぱり子供達に「生まれてきてよかったんだよ」と言える映画を作りたいかな、それができたらいいなと思うわけです」。どうか『終着点』と題された本が出ませんようにと願うばかりである。(はや)

折り返し点  
1997-2008  
宮崎駿宮崎駿  
出発点  
1979-1996

## 人権と伝統の狭間を考える——南アジアの人権侵害事例を焦点に

グローバルサウスと呼ばれる国々とその周辺国は宗主国からの独立以降、近代的な自由民主主義社会の構築を目指すこととなった。一方で、社会の実践的な側面においては、未だに様々な伝統的規範が根深く存在している。

このような社会において、いったい何が「社会的正義」であるのか、すなわち尊重されるべきであると考えられている個人の自由と伝統的な社会規範はどこで折り合いをつけるのか、その道徳的な正統性を判断する基準はどこにあるのか、そして何に基づいて社会規範を構築していくことが「社会的正義」を達成することにつながるのか……。これらの果てしない疑問を、ヘーゲルやカントが行ってきた既存の法哲学論を丁寧に分析しながらも、新たな視座から議論を行っているのが『自由の権利——民主的人倫の要綱』である。



この本の内容が議論される地域の例として、南アジア諸国が挙げられる。南アジア社会における人権観念は、西欧諸国で論じられている人権とは異なり、伝統的規範を重んじた上で人々に周知されている。このような国々に対しても、西欧諸国が構築した「社会的正義」を適応するべきなのだろうか。

南アジアの伝統規範の一例として、「家族に不名誉をもたらしたとみなされる女性に対してその家族の男性がふるう暴力行為、通常は殺害」である名誉殺人が挙げられる。婚前交渉や離婚、異カースト間の結婚を行った者、性暴力被害者などに対して（主に）女性を死に至らしめることとなる伝統的な社会規範である。現在は法的

には禁止されているものの、毎年被害者が出ている。このように、人間の生死にかかわるような伝統については、西欧諸国がもたらした社会的正義の基準である人権遵守という観点からも、廃止するべきであると考えられるだろう。

一方で、寡婦に対する【差別】についてはどうだろうか。インド社会においては、寡婦（夫を亡くした女性）は不吉な存在として扱われる。剃髪や単色のサリー着用、ハレの儀式への参加拒否が要求される。【差別】の理由として、インド社会における結婚の意味の一つに、女性の性的管理を一人の男性が行うことが挙げられる。そのため、寡婦が社会的に再婚することが困難であるという状況下において、周囲の男性から性的な魅力や寡婦から喪失させられると考えられている。このように、一見して人権侵害とされる【差別】でも、女性の性管理に対して伝統的な意識が残っている南アジア社会においては、女性の貞操を守り、社会的な居場所を守るための伝統的規範であると考えられることもできるだろう。

このような南アジアにおける人権侵害とされるような事例を集めた論集が『インド・剥き出しの世界』である。普段なかなか触れることのない南アジア社会の諸相を、



様々な分野の学者が「南アジア」と「人権侵害」という共通のキーワードに関連する事例を用いて詳細に説明している点において非常に秀逸である。南アジアに少しでも興味のあるすべての人に読んでほしい。

（フナチ）

## 編集後記

今号では谷崎由依さんにインタビューさせていただきました。真摯に編集委員の質問を受け止め、丁寧にお言葉を紡いでくださった谷崎さん。本編では字数制限のため書き切れなかったお話を一部ご紹介いたします。

中高時代、ただ友達と楽しく遊んでいるだけではだんだん消化できない何かが溜まって、そういうのをノートに書いていました。「アサガオの観察日記を書くように自分の観察日記を書こう！」って何冊も独白ノートを作って、その延長でずっと書いているところがあった。小説家として人に文章を読んでもらうようになった時、人に読ませるための文章の書き方がよくわからなくて、デビューしてからやっとバランスが掴めるようになってきました。でも今でも、依頼されて書くエッセイであっても、この一文を書けたことで自分を取り戻せたという感覚になる事があります。

書くことで自分を取り戻す。そのお言葉にはっとしました。綴葉での短い執筆歴でも、確かに文字を綴る中で本当の自分に会った経験があるのです。深い物思いの森を彷徨うとき、「書く」ことは光差す出口へ向かうための力となる。谷崎さんとお話を通し、「書く」ことの魅力を改めて感じました。

(ひるね・黄丹・浅煎り)

## 当てよう！ 図書カード

まだまだ暑い日が続きますが、気づけばもう10月ですね。10月の頭には、ノーベル賞受賞者が発表されますが、ここで問題です。1922年に、物理学者アインシュタインがノーベル賞受賞の知らせを受けたとき、彼はどこにいたでしょう？

1. 自宅のキッチン
2. コンサートホール
3. 動物園
4. 船の上

(茫漠)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは11月15日です。



《6月号の解答》 6月号の問題の正解は、2. のアメリカでした。アイスティーは1904年のセントルイス万博で、暑い夏に紅茶を売るために考え出されました。図書カードの当選者は、ヨルシカさん、ほんぬさん、あるくさん、怪物の栄養源さん、えび天天さんの5名です。当選おめでとうございます。

(りっち〜)

## 読者がらひらひら

○寝る間を惜しんで読んだ本特集いいですね！ 確実に寝たほうがいいのにやめられなくて、読み終わって作品の世界に浸りながら寝るのが最高です。(農学研究科・スミレ)

―特集をお楽しみいたしたきありがとうございます！ これからの秋の夜長にもぴったりな本が揃っていると思います。バックナンバ―はウェブでもご覧いただけますので是非。

○読んだことのある本でさしたる感想も持たずほとんど忘れるように通り過ぎてしまったものが、綴葉で紹介されていると、また読みたくなります。他者の視点を垣間見られること、有難いです。(文学研究科・青でんぶ)

―ありがとうございます。新しい本を知りたいだけなく、本について思いを巡らせるきっかけに本誌をご活用いただければ幸いです。

○最近書店に行くところ〇〇〇〇円で暮らせる！的な節約重視タイトル本が多すぎないか？ こんな日本ではいけないと思うのだが……。

(ミミツ・天フルそは大盛)

―お金も時間も限られた現代だからこそ心に残る本を見つけた手助けができればと思います。乱読にも良さがあるのでそういった余裕のある社会にしたいですね。(りっち〜)